

2022年01月21日

[LAにおける「ピンクの潮流」 英ウィキより](#)

ラテンアメリカにおける「ピンクの潮流」

Pink tide (西 : marea rosa)

From Wikipedia

https://en.wikipedia.org/wiki/Pink_tide

これは英語版ウィキの「Pink tide」を部分訳したものです。

「ピンクの潮流」とはなにか？

21世紀初頭にラテンアメリカ諸国に登場した政治変革の流れ。

親米・新自由主義という、これまでのラテンアメリカ諸国の姿勢から離れ、自主政治と自立経済を目指し、社会的人権を重視する方向への変化を総称する。

2010年代には、「ピンクの潮流」に対抗する保守派の攻撃が強まった。米国と結びついた保守派は、この流れを「反米」、ポピュリスト政治、権威主義と特徴づけた。

米国の干渉と保守勢力の攻撃によって2010年代の後半には左翼政権はキューバ、ベネズエラ、ニカラグアの3カ国まで減少したが、2010年代の末からメキシコ、アルゼンチンの自主・進歩派の当選が相次ぐようになった。

この流れはこの1年余りでさらに加速され、最近では第二の「ピンクの潮流」と呼ばれることもある。



ピンクの潮流を生んだ歴史的背景

第二次世界大戦後、ラテンアメリカでは一連の左翼政府が選出された。1954年のグアテマラ、1964年のブラジル、1973年のチリ、1976年のアルゼンチン等が挙げられる。しかしその多くは、米国政府・CIAが後援する軍部クーデターにより打倒された。その典型が、キッシンジャーの起案したチリのクーデターである。

米国はチリのクーデターの後、たんに左派系政権を倒すだけではなく、右翼の軍事独裁政権を樹立して、左派勢力の息の根を止めようとした。これが「コンドル作戦」と呼ばれるものである。

軍や傀儡政権の支配する権威主義体制は、政敵を違法に拘禁し、本人のみならず家族まで捕らえ、拷問、失踪（ひそかな処刑）、子供の人身売買など、最悪の人権侵害を重ねた。この人権蹂躪が明らかになるにつれ、ヨーロッパや米

国内での抗議が高まり、ワシントンは軍事政権への支持を取り下げざるを得なくなった。

こうしてラテンアメリカ各国に民主政治が復活したが、軍事独裁政権が作り出した膨大な対外債務は、長く政府を苦しめた。

左翼勢力は軍政時代にほぼ壊滅した。さらにソ連・東欧の崩壊を受けて、左翼は資本主義を受け入れ体制内改革を志すようになった。米国もこれを黙認した。

1990年代、左翼はこの機会を利用して基盤を固め、地方レベルでの統治の経験を積んだ。

「絶望の10年」の末期、民営化、社会支出の削減、外国投資の新自由主義政策はラテンアメリカの人々に耐え難い苦しみを与えることになった。高水準の失業、インフレ、そして拡大する不平等が蔓延した。インフォーマル経済で働き、重大な不安に苦しむ人々の数が増加し、労働者階級と伝統的な中道左派政党との結びつきが弱まった。

民衆の自発的な抗議行動が相次ぎ、草の根の抗議活動を基盤とする新たな政治勢力は、中道や中道左派を拒否して左派へと結集するようになった。

政治権力に到達した最初の左翼は1998年に大統領に選出されたベネズエラのウゴ・チャベスであった。その後ブラジルのルーラ（2003年に発足）と、ボリビアのエボモラレス（2006年に発足）の左派政権が相次ぎ誕生した。彼らは南アメリカの左翼の「3銃士」と呼ばれた。

2000年代の商品ブームと左派政権の成果

21世紀初頭、世界に商品ブームがやってきた。食品、石油、金属、化学薬品、燃料などの価格が上昇した。主な原因は、中国を先頭とする BRIC 諸国における需要の増加とされる。

中国は工業化された国になり、資源を必要とし、ラテンアメリカの左翼政府と提携した。ラテンアメリカ諸国は中国とウィンウィンの関係になり、貿易の発展により経済が成長した。左派政権はそれを格差解消、社会福祉増進に用いた。

2010年代の世界不況と左派政権の退潮

(この項目の記述には一部異議があるが、そのまま掲載)

チャベスの影響力は2007年にピークに達した。しかし石油収入への依存がベネズエラを経済危機に導いた。ニコラス・マドゥロは前任者の国際的な影響力を持っていなかった。

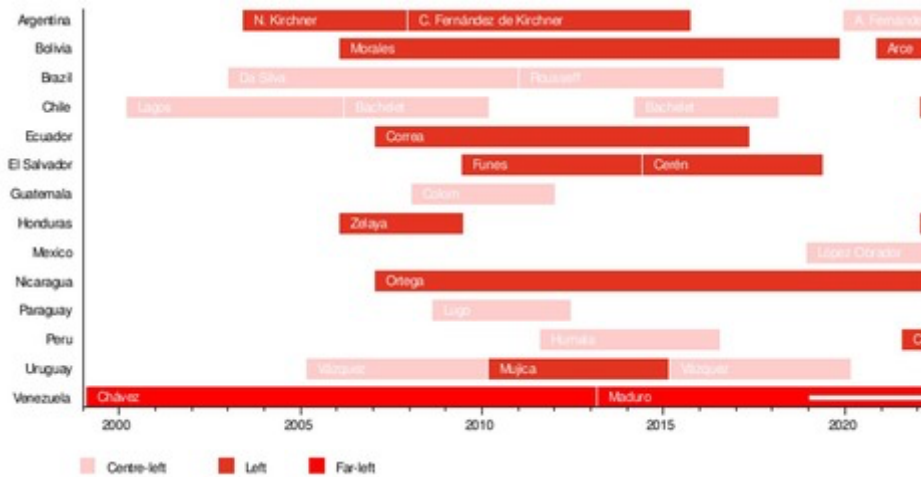
2010年代半ばまでに、中国経済は停滞期に入り、ラテンアメリカへの投資も減少し始めた。2015年は「ピンクの潮流が変わった年」と言われる。

リーマンショックとそれに続く欧州金融危機で、世界経済は停滞し、商品需要も減少した。それまでの過剰支出と相まって、政策は持続不可能になり、支持者は離れていった。とりわけ、無防備のまま中国の資金を受け取ったアルゼンチン、ブラジル、エクアドル、ベネズエラで、その傾向はより明白であった。

ニューヨークタイムズは、「ラテンアメリカの左派の指導者は経済を多様化せず、持続不可能な福祉政策を持ち、民主的な行動を無視した。その城壁は、広範な腐敗、中国経済の減速、貧弱な経済選択のために崩壊している」と述べた。

(これはほとんど誤りである。左派政権のほとんどは米国の金融制裁、為替操作、経済封鎖、米連邦裁によるバッシング、議会を利用した陰謀、大衆蜂起に見せかけた事実上のクーデターなどにより、政権の座から引きずり降ろされた。人権や自由はそのための口実に

過ぎなかった)



アルゼンチンでは大統領のためのクリスティーナ・フェルナンデス・デ・キルチネルの後継者が中道右派に敗れた。その後まもなくブラジル大統領ジルマ・ルセフの弾劾が始まり、彼女の解任に至った。

エクアドルでは、引退したラファエル・コレア大統領の後継者が、突如右展開した。国外亡命を余儀なくされたコレアは、新大統領を「裏切り者」と「羊の服を着たオオカミ」と非難した。

2010年代後半からの復活

復活した中道右派ないし右派政権は、景気の回復にも債務の改善にも成功しなかった。貧富の差だけが拡大した。国民には「失われた10年」の再現と映った。

早くも18年、メキシコ大統領選挙で左派のロペス・オブラドールが当選した。翌年にはアルゼンチンで現職の右翼大統領が中道左派のアルベルト・フェルナンデスに敗れた。

この傾向は 2020 年のボリビア大統領選での、左翼 MAS のルイス・アルセの地滑り勝利によって明確となった。

この傾向は 2021 年を通して続いた。ペルー総選挙では 2 つの意味で初めての大統領が生まれた。ペドロ・カスティージョは新自由主義を拒否する初の大統領であり、初の先住民指導者出身である。

11 月、ホンジュラスは初の女性大統領シオマラ・カストロを選出した。その数週間後、チリでは左翼のガブリエル・ボリックが当選した。

大衆の抗議行動も激発している。メディアは無視するか軽視するが、2019 年チリの抗議、2019 年コロンビアの抗議、2019 年エクアドルの抗議、2021 年コロンビアの抗議が含まれる。

(訳者注： これらはベネズエラやニカラグアの暴動のような陰謀的なものではなく、政府の緊縮措置と所得の著しい不平等に対する民衆の抗議であり、明らかな経済的裏づけを持ったものである)

Suppliment 「ピンクの潮流」の各国における実績

左派系政府は最低賃金の引き上げ、補助金などの福祉支出の拡大などにより、新自由主義経済の緩和を図った。失業者、非正規雇用者、母子家庭、底辺労働者などへ手厚い給付を提供した。

ボリビアでは前近代的な社会を改革し、先住民女性や LGBTI の権利を改善し、国際的に賞賛された。モラレス就任後 5 年の間に、ジニ係数は 0.60→0.47 に急減した。

ブラジルは南北アメリカで最も高い貧困率となっていた。極度の貧困、栄養失調、健康問題で国際的に悪名高い貧民街が存在した。農村部でも極度の貧困があった。

ルラ大統領のゼロ飢餓（Fome Zero）などの社会的プログラムは、ブラジルの飢餓・貧困と不平等を減らし、健康と教育を改善した。

ルラの8年間の在職期間中に、約2,900万人が中産階級に列せられた。ルラは80%の支持率を保ったまま在職期間を終了した。

アルゼンチンでは、キルチネルとフェルナンデス・デ・キルチネルの夫妻が政権をつなぎ、団体交渉を復活させ、労働組合を強化した。労働組合の組織率は1990年代の労働力の20%から2010年代には30%に増加し、労働者の割合が増えるにつれて賃金が上昇した。

これらの社会投資の結果、1日3米ドル以下で生活する極貧層の比率は20%低下した。アルゼンチンのジニ係数、ラテンアメリカで指折り数えるレベルに達した。

育児資金の給付計画は200万以上の貧しい家族をカバーし、アルゼンチンの子供たちの29パーセントをカバーした。このプログラムにより15歳から17歳までの子供たちの就学率が3.9%増加したと推定されている。

ベネズエラでは社会福祉、住宅、地域のインフラへの支出が増えた。さらにチャベスは医療や教育などの分野で無料のサービスを提供し、補助金付きの食糧配給を確立した。

エクアドルでは、厳しい経済危機と社会的混乱により右翼のルシオ・グティエレスが大統領を辞任した後、2006年の大統領選挙でラファエル・コレアが当選した。

コレアはイリノイ大学のエコノミストでこれまでの左派とは一味違った混合経済政策を実践した。解放の神学の影響を受けた実践的なカトリック教徒であるコレアのもとで、エクアドルはすぐに前例のない経済成長を経験した。

コレアの人気がどれほどのものであったかは、彼が数年連続でアメリカ大陸で最も人気のある大統領に選ばれたという事実を見てもわかる。